

世界は相変わらず大きな臭い。大国の勢力図が変化し、国連の威信は回復しそうにない。小手先だけの対症療法がもはや通用しないこの大状況を考えると、それこそ無力感に襲われる。それでも地球は回り続け、昼夜が存在する。万年単位で見れば、人類の歴史も一瞬にすぎない。なんだか強がりと言っているようだが、どうやらこうして視点を変えるしかなさそうだ。

われわれは今、国難というより世界難に直面していると考えるべきだろう。この難局を乗り越える思考を獲得するにはブラジルの写真家、セバスチャン・サルガドに見られるような地球を俯瞰する目を養う必要がある。彼の写真を見た者は世界の見方が変わるはずだ。宇宙飛行士が地球へ帰還した後、信仰に目覚め、宣教師になることがあるが、それも地球を俯瞰した経験による。だがサルガドは宇宙を飛行したわけではない。彼が行ったのはむしろ地球の起源に迫ることだった。それが結局宇宙的視点へとつながることになる。彼はいわば地球を逆さまに俯瞰したのだ。譬えるなら、地獄、煉獄、天国界を同時にイメージしたダンテのスケールを、彼は現実レベルで獲得したと言えるだろう。そして得た結論が地球を愛することだった。

顕微鏡から天文台の望遠鏡まで、人は大小のスケールを駆使して事物を捕えられるようになった。それは素晴らしいことだ。だがその素晴らしさにどれだけの人が気づいているだろう。気づいたとしても、それを軍事兵器に用いたのではむしろマイナスである。敵に対し優位に立つという理由で武器の開発を進めるなら、相手はさらに強力な武器を生み出そうとするだろう。第一敵と味方を分かつのは誰なのか。この白黒の二分法を操るのは誰なのか。それは冷戦的思考からいまだ抜け出せない人々である。

そうした思考がもたらすダメージを人は嫌と言うほど知っているはずだ。それでも自分に降りかからない災害は災害ではないと

考える人々が存在する限り、地球は傷つき、血を流し続ける。彼らはこの種の議論をナイーブすぎると笑うだろう。サルガドの植樹による山林の再生という事業も最初は大海を耕すのに似ていた。ジャン・ジオノの「木を植えた男」は寓話的な短篇だが、サルガドの活動は現実のものであり、実際再生に成功しているのだ。

東北の被災地でもヒマワリの種をまき、桜の木を一本ずつ植える人々がいる。彼らの地道な活動が脚光を浴びることはまれで、飯に浴びたとしても、一時的にメディアに取り上げられるだけで、翌日には忘れられてしまっただろう。だが、種まく人や木を植える人が、被災することで覚醒したのであれば、それは現実であってフィクションではない。

行動し、その結果を人に伝える。すると自分もやってみようという人が現われるかもしれない。そうならば大きな前進となる。ア・フガニスタンで井戸や用水路を作る活動を続けた医師の中村哲氏の話はメディアでも取り上げられ、よく知られている。あるいは、簡単な発電装置を作って現地に明かりをもたらしたりしている人もいる。こうしたソフトな活動の力は一発のミサイルの破壊力に比べれば蚊の涙ほどの力もないが、創造という点では破壊しかできないミサイルにはるかに勝る。メディアはそのことをもって主張してもいいのではないか。

筆者は近所の花屋でジャカラランダの苗を買い、それを育てていたら、最近ついに紫の花が咲いた。半信半疑の人も、写真を見せると納得してくれる。ところで、しばらく前に気がついたのだが、大学のキャンパスの一角にジャカラランダの種をまいた人がいて、それが芽吹き、すくすく育っている。キャンパスに育つジャカラランダがいつつばみをつけるか、今からとても楽しみだ。